

# Travel & Life

JTB旅カード ゴールド会員誌「トラベル&ライフ」



南フランス

トゥールーズからカルカソンヌ、アルビへ  
**麗しき、オクシタニー地方**

みんなで行こうよ! ● 滋賀編 陶芸体験 & レトロ鉄道

ニッポン食べ歩き図鑑 ● 新潟県・村上市

千年の味を楽しむ越後の旅

極め旅 ● 静岡県・浜松市 ハーモニカ

JTB旅カード  
ゴールド会員限定



JTBのお店&Webで使える  
**トラベル&ライフ  
クーポン**付き!

〈総額6,500円相当〉

南フランス / トゥールーズから  
 麗しき、  
 オクシタニー地方  
 カルカソンヌ、アルビへ

フランス南部に位置するオクシタニー地方。  
 その中心都市であるトゥールーズでラグビー愛を感じ、  
 カルカソンヌで城塞都市を訪ね、  
 アルビで中世の面影を残す街歩きを楽しむ。  
 オクシタニー地方を代表する3都市の美しい景色と文化、食を堪能した。

文=木村理恵子 写真=葛西亜理沙



ガロンヌ川畔から望む夕日とサンピエール橋

取材協力=フランス観光開発機構 (Atout France) [www.france.fr/ja](http://www.france.fr/ja)  
 オクシタニー地方観光局 (Destination Occitanie) [www.tourisme-occitanie.com](http://www.tourisme-occitanie.com)  
 トゥールーズ観光局 (Toulouse Tourisme) [www.toulouse-visit.com](http://www.toulouse-visit.com)  
 オート、カタリ派の里観光局 (Aude, Pays Cathare) [www.audetourisme.com/en/](http://www.audetourisme.com/en/)  
 タルン県観光局 (Tarn Tourisme) [www.tourisme-tarn.com](http://www.tourisme-tarn.com)



5



8



6



7

1日本戦が行われるスタジアム・ド・トゥールーズ。今回は33,080人を収容 2「スタッド・トゥールーズ」の公式ショップ 3ユニフォームが一番人気 4右から哺乳瓶、ベビー用の靴下、おしゃぶり。赤ちゃん用品も多彩 5人気メニューの生ハムやサラミの盛り合わせと鴨肉のコンフィ 7ラグビー関係者が集まる「J'GO」 8「今回のワールドカップは、トゥールーズの街を知らない日本人に知ってもらえる良い機会」と話すフロアマネージャーのブノワ・フレジャックさん



## トゥールーズ ラグビー愛に満ちた バラ色の街



4



3



2



### ラグビーファンが集う名店

トゥールーズは小学校の体育でラグビーをするほど、ラグビーが身近にある。地元クラブチーム「スタッド・トゥールーズ」はフランス国内では最多優勝を誇る名門で、熱狂的なファンを持つ。

市内にある公式ショップを訪ねると、ラグビーファンで賑わっていた。店内にはユニフォームやTシャツなどと一緒に哺乳瓶やおしゃぶりなどベビー用品が揃っているのを見てもラグビーが身近にあるのがうかがえる。

また、元ラグビー選手が経営するレストランやバーなど、ラグビーに縁のある店も数多い。レストラン「J'GO」もそのひとつで、現在はフランス代表メンバー選出に関わるラグビー関係者がオーナーを務めている。

自慢のメニューは、契約農家から買い付ける牛や鴨などを使った肉料理。ソーセージやサラミ、ハムなどは全て自家製で、塩分を控え、化学調味料は一切使用していない。注文した鴨のコンフィは表面がパリッとして、肉はホロホロとやわらかく、赤ワインが進む。ラグビーファンならずとも通いたくなる一軒だ。

最初に訪ねたのはオクシタニー地方の中心都市・トゥールーズ。パリのシャルル・ド・ゴール空港から国内線に乗り継ぎ約1時間20分で行く。そこから市内中心部まで車で20分ほど近い。

到着後、真っ先に向かったのは、スタジアム・ド・トゥールーズ。この9月に開催されるラグビーワールドカップで日本代表の1次リーグ2試合が行われる会場だ。

スタジアムは市内を流れるガロンヌ川の中洲にあり、市内中心部からは約3kmと近い。中洲は1930年代に市民の健康増進を目的に公園などが整備され、スタジアムも1936年から38年にかけて建築。その後何度か改修を重ね、1998年にはサッカー、2007年にはラグビーのワールドカップが開催されるなど、数々の大きな国際大会の舞台になっている。

取材に訪れたのは5月下旬。スクリーンや一部バルコニーの取り替えを終え、現在は屋根の補修の真っ最中で、来たる日に向けて着々と工事が進んでいる。

観客席からコートを見下ろすと、芝生が青々としている。聞けば、砂やコルク、化学繊維を混ぜた人工の土に種を蒔いて育ったハイブリッド芝で、芝生の持ちが良く、水はけも良いので雨天の時も選手がプレーしやすいという。

特別にコートのそばまで入ることができた。選手が入場する通路からグラウンドに出たとたん、「わあ」という声が自然と漏れた。数カ月後、ここで繰り広げられる熱戦を思うと、聞こえるはずのない歓声さえも聞こえてくるようだ。



9 サン・セルナン教会は八角形の鐘楼が目印。内部は厳かな雰囲気漂う  
10 11 ジャコバン修道院。1本の柱から何本も梁が伸びるさまは椰子の木を思わせる  
12 ガロンヌ川越しに見える丸いドーム屋根の建物はサンジョゼフ礼拝堂で病院に併設している



は紀元前3世紀まで遡り、その後ローマの植民地や西ゴート王国の都などを経て、16世紀には商業都市として栄えた。現在は宇宙産業や航空機産業の都市としても名高い。

そうした歴史を物語るスポットも数多い。そのひとつがサン・セルナン教会。この地にキリスト教を布教したという聖セルナンを祀る教会で、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラの聖堂を模して11世紀末に建造された。ロマネスク建築としてはフランスで最大規模を誇る。

ジャコバン修道院も必見だ。建物は総煉瓦造りのゴシック様式で、13世紀初期の建造。当時、勢力を伸ばしつつあったキリスト教の異端といわれたカタリ派からの巻き返しを図り、ドミニコ派がパリに次いで2番目に建てた初の修道院として知られている。見どころは内陣の高いアーチ型をした天井で、7本の円柱が立ち、柱とそこから放射状に伸びる何本もの梁とで天井を支えているのが特徴だ。

ピレネー山脈を水源とするガロンヌ川沿いは格好の散策エリア。川沿いには遊歩道やベンチが設けられ、昼も夜も河畔で憩う市民や観光客の姿が見られる。また、ボンヌフ橋付近はビュースポットとして人気がある。

5月のトールーズの日没は遅い。ボンヌフ橋の近くで夕食を済ませたのが21時過ぎ。その時間でも空はまだ明るい。川沿いを歩いて行くと、ちょうど雲間から太陽が顔を出し、川面と空を淡いピンクに染める夕景が広がった。優しい景色に癒されてトールーズの最後の夜は幕を閉じた。



1 白亜の建物が目を引くヴィクトール・ユーゴー市場 2 3 野菜や魚の陳列も日本とはひと味違っておしゃれ 4 人気の精肉店。店の奥にラグビーボールが輝く。女性が身につけているネックレスはスタッド・トゥールーズのグッズだという 5 ワインに合うチーズを教えてください 6 キャピトル広場のアーケードの天井画も見もの 7 煉瓦の褐色と石灰石の白のコントラストが美しい市庁舎は市のシンボル

### 歴史を物語る建造物と川沿いの散策

トールーズはパリ、リヨン、マルセイユに次ぐ第4の都市。その歴史は古く、始まり

「ラグビー愛」を発見したのは、広場のアーケードに施された天井画。トールーズ出身の有名人や歴史的な出来事、名物などを描いているが、その中にラグビーの一場面を描いた一枚が、広場の美しさと共に鮮やかな天井画も楽しんでほしい。

市のシンボルで淡いピンクの大理石と煉瓦を用いた壮麗な建物・市庁舎とその前のキャピトル広場は、市内観光に欠かせないスポット。トールーズは煉瓦の赤褐色の色合いから「バラ色の街」と称されているが、広場を取り囲む煉瓦造りの建物をみると、その形容もうなずける。

「ラグビー愛」を発見したのは、広場のアーケードに施された天井画。トールーズ出身の有名人や歴史的な出来事、名物などを描いているが、その中にラグビーの一場面を描いた一枚が、広場の美しさと共に鮮やかな天井画も楽しんでほしい。

トールーズの街を歩くと、あちこちで「ラグビー愛」を感じる。市民の台所として親しまれているヴィクトール・ユーゴー市場がそう。1896年にオープンした歴史ある室内市場で、現在の5階建ての建物が建築されたのは1959年。1階が店舗、2階がレストラン、3〜5階は駐車場になっている。

1階には約60軒の店が立ち並び、その中には、地元の「スタッド・トゥールーズ」の旗やラグビーボールを飾る店があった。店先に並ぶのは、フルーツや野菜、魚介類、チーズ、ワイン、腸詰、精肉など多彩。精肉店には豚や鶏のほか鴨やウサギなども。一角にはワインの立ち飲みスペースがあるのもフランスらしい。





6



8



7

**名物のカスレに舌鼓**  
シテ内にはみやげ物店やレストラン、カフェ、ホテルなどが立ち並んでいる。その中のレストラン「COMTE ROGER」で昼食をとった。お目当ては、フランス南西部の郷土料理「カ

路も歩くことができ、矢狭間や出し狭間など当時の防衛の工夫を間近に見ることが出来る。城内を見学後は内壁の上を歩いた。城内や城外は進むごとに景色が変わってくる。絵本に出てくるような城壁と堅牢なコンタル城が織りなす風景だったり、のどかなブドウ畑だったり…。どれもこれも立ち止まって写真を撮りたくなるものばかり。いずれの風景も穏やかで、ここが城塞として造られたのを忘れてしまうほどだ。

で煮込み、味付けは塩・コショウのみだという。肉はそれぞれの味が引き立ち、白インゲン豆は肉の旨味をたっぷり含んでいる。カスレは店によって材料や作り方が違うので食べ比べを旅の楽しみに加えるのもいい。

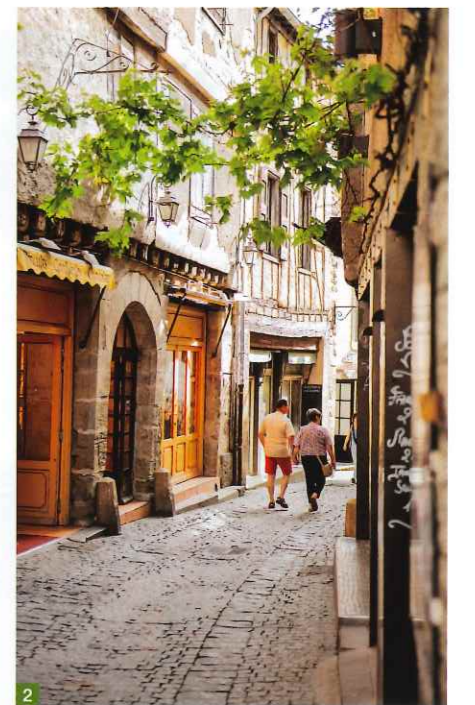
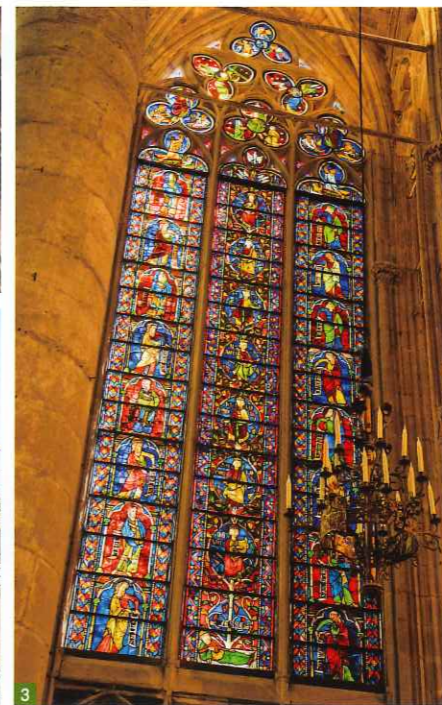
スレ」。これは鴨や豚肉、ソーセージとたっぷりの白インゲン豆などを土鍋に入れて長時間間煮込んで作る豆のシチューのこと。前菜とワインを楽しみながら待っていると、直径15cmはある土鍋に入ってカスレが運ばれてきた。中央に鴨のコンフィ、その周りに豚肉やソーセージがのり、その間から白インゲン豆が顔を出している。見るからにこれが一人前？と思うほどボリューム満点だ。ひと口味わってみると、見た目よりもあっさり。聞けば、ブーケガルニを入れたブイヨンで煮込み、味付けは塩・コショウのみだという。肉はそれぞれの味が引き立ち、白インゲン豆は肉の旨味をたっぷり含んでいる。

1 世界遺産の城塞都市・カルカソンヌ。かつての街を守った内壁は今では絶好のビュースポット 2 まるで中世に迷い込んだようなシテの街並み 3 聖堂の内部にあるステンドグラス。いずれも精巧で華やか 4 風格があるサン・ナゼール・バジリカ聖堂 5 ポリューム満点のカスレ。赤ワインともよく合う 6 「COMTE ROGER」のテラス。緑の葉が清々しい 7 オーナーでシェフのピエール・メサさんと奥様のシルヴィさん 8 正門に当たるナルボンヌ門



9

## カルカソンヌ 堅固な二重の城壁を持つ城塞都市



トールーズを訪ねたら、ぜひ足を延ばしたいのが、車で1時間ほどのところにあるカルカソンヌ。二重の城塞に囲まれた城塞都市で、フランスではモン・サンミッシェルに次ぐ来訪者を誇る国内屈指の観光地だ。大西洋と地中海を結ぶルート上に位置するカルカソンヌは、古くから交通の要衝にあった。内側の砦が築かれたのは3世紀といい、その後13世紀にアルビジョア十字軍がカルカソンヌの地を征服してフランスの領土になると、ルイ9世がさらに砦を巡らせて二重の城塞ができた。1659年にスペインと平和条約が結ばれると城塞としての役目はなくなり荒廃。19世紀に復元して総延長約3kmの城壁を持つ中世の城塞都市が蘇った。入口はいくつかあるが、正門にあたるナルボンヌ門から城壁内へ入る。城壁内は「シテ」と呼ばれ、中世の面影を色濃く残している。見どころのひとつがサン・ナゼール・バジリカ聖堂。11世紀にロマネスク様式で建てられたが、13世紀に王家の所有になるとゴシック様式に改修。だが全ての工事は終わらず、ロマネスク様式とゴシック様式を併せ持つ希少な建物となった。目を引くのはステンドグラス。キリストの生涯を16の場面で描いたものや、キリストの系図の一部を現したものでどれも華やかで美しい。もうひとつはコンタル城。当時この地を治めていた子爵によって1130年頃に建てられたもの。内部に入ると、シテの歴史を紹介する映像上映や石彫や遺跡などを展示する博物館があった。かつて兵士が巡回していた通



1 大聖堂の内部。天井を埋め尽くす鮮やかなフレスコ画は当時のままで、一度も修復されていない 2 威厳のある外観が印象的なサント・セシル大聖堂 3 赤煉瓦の建物が立ち並ぶ旧市街 4 かつての司教館は1922年にロートレック美術館としてオープン。館内は多くの観光客で賑わう 5 美術館から庭園越しに見える街並みはアルビ随一の眺め



た。柱や梁など至る所に緻密な装飾が施され、豪華絢爛だ。見上げるとアーチ型の天井には、聖書の物語をモチーフにした色鮮やかなフレスコ画がびっしり……敵かであり、かつ華やかに圧倒された。

西側祭壇の正面にあるテンペラ画「最後の審判」も見逃せない。15世紀に描かれたもので、大きさは約200㎡とフランス最大級。このほか、身廊と内陣を区切るジュベと呼ばれる仕切り壁に施された彫刻など見どころは尽きない。

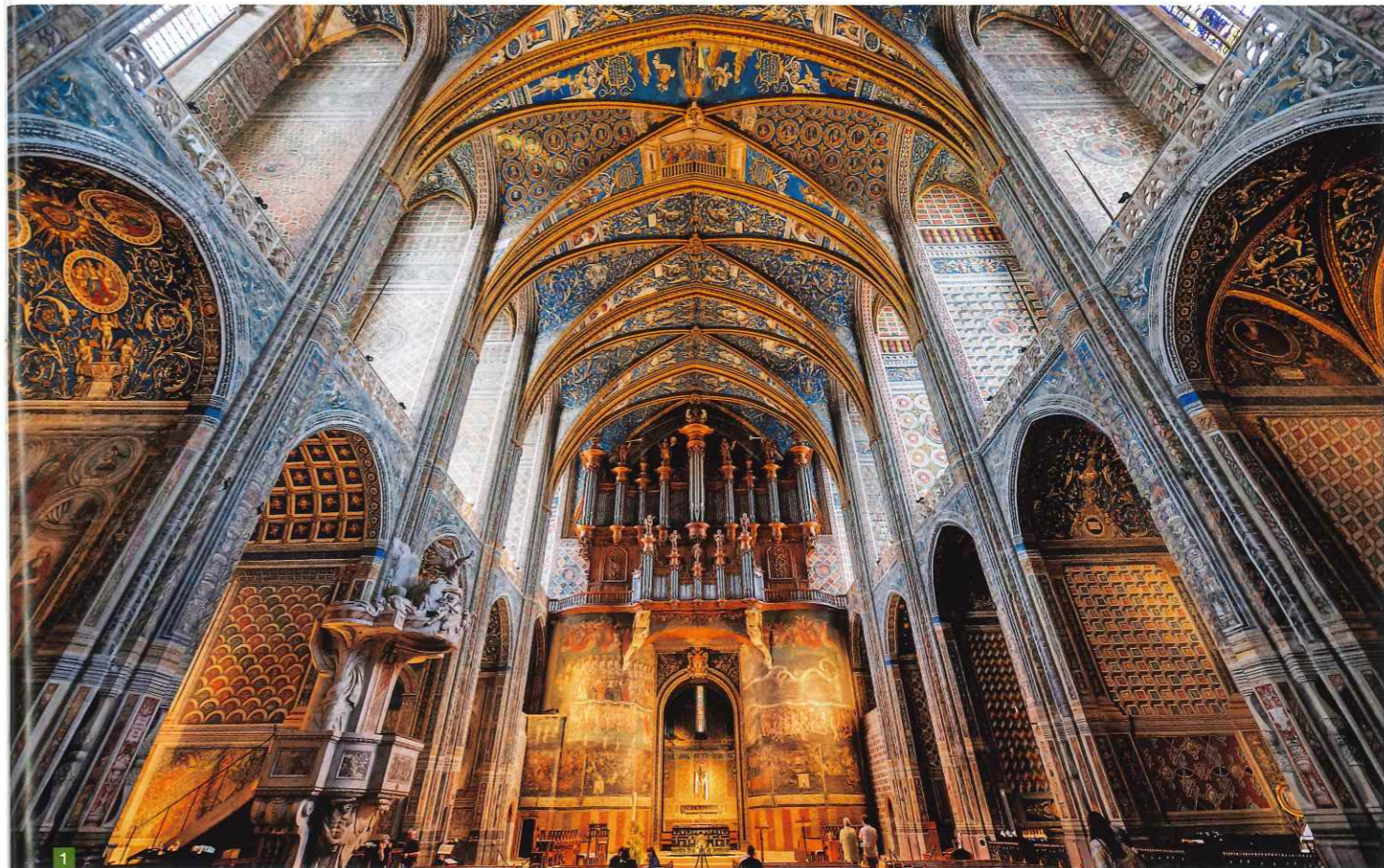
**ロートレックの作品を鑑賞**

サント・セシル大聖堂の背後に立っているのがベルビー宮。かつて司教が寝泊まりをした司教館で、現在はロートレック美術館となっている。

ロートレックこと、アンリ・ド・トゥールーズ・ロートレックは1864年に伯爵家に生まれる。後期印象派の画家で、ポスター画家の第一人者としても名高い。同館は彼の母が素描や油絵、水彩、ポスターなど1000点を超える作品を寄贈したことで誕生した。

館内は時代とテーマによって構成され、ロートレックの絵の変遷がわかる。彼を一躍有名にしたパリのキャバレー「ムーラン・ルージュ」のポスターもある。

作品と共に楽しみたいのが、幾何学的なデザインが印象的なフランス式庭園。深い緑の向こうに穏やかに街を流れるタルン川と煉瓦の街並みが広がる風景は、一幅の絵のように美しい。



## アルビ 画家・ロートレックが生まれた 中世の面影を残す街

トゥールーズの北東、車で約1時間のアルビもまた、オクシタニー地方きつての観光地。タルン川沿いに開けた都市で、人気画家ロートレックの故郷としても知られる。中世の面影を残す赤煉瓦の街は、「アルビ司教都市」として世界文化遺産に登録されている。

街のシンボルは、サント・セシル大聖堂。高さ約78mあるという鐘楼は街のいたるところで目に入るランドマーク的存在だ。

大聖堂の建築にはこんな歴史的背景がある。中世のアルビは異端とされるカタリ派を容認したことから、アルビジョア十字軍に弾圧さ

れた後に制圧され、カトリック司教が支配する司教都市になった。その戦いのさなかの1282年、カトリックの権威を示すために建てられたのがこの聖堂だ。完成をみたのは1480年。着工から実に約200年もの歳月が費やされた。

建物は、赤煉瓦造りで南フランス特有のゴシック建築。東西に幅約110mあり、約40mの壁が聳え立つ姿は大聖堂というより城を思わせる。

重い扉を開けて中に入ると、外観の赤から一転、ブルーを基調とした別世界が待っている。



「この品種は白ワインを作るロワン・ド・ルイユ。この地域で昔から栽培されている品種で、今もほかでは栽培されていない貴重なもの。このほかモザック、オンデック、赤はデュラスなどガイヤック特有の品種を育てています。そうした品種のワインが楽しめるのが魅力です」と話すのは、同ワイナリーの共同経営者のひとり、フィリップさん。良質のブドウを育む畑にもこだわります。肥料は牛の糞を使い、化学肥料も農薬も一切使わない。また、赤用のブドウは土壌の違う別の場所でも栽培するという。

さっそく白ワインを試飲した。グラスの中でほんのり黄金色に輝き、口に含むとフレッシュで軽やか。オクシタニーの魅力と同様に飽きがない味わいだ。



10



13



12



9



7



8



11



12



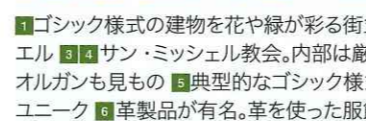
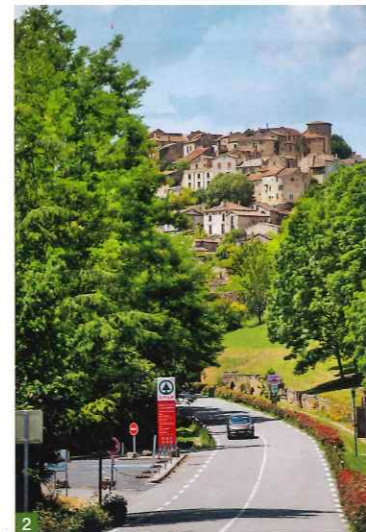
13

## ガイヤック 伝統品種で作る 貴重なワインの産地

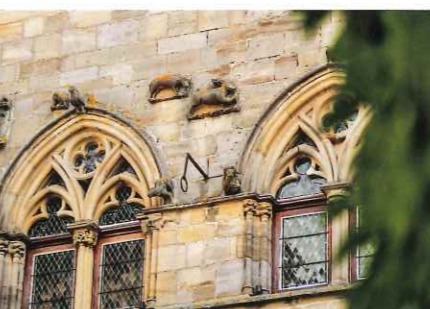
ガイヤックもまた魅力的な場所だ。フランスのワインといえば、シャンパーニュやブルゴーニュなどが有名だが、フランスでもっとも古いワインの産地のひとつでもある。

訪ねたのは、ワイナリー「DOMAINE GAYARD」。それまでもブドウ栽培をしていたが、ワインの醸造・販売を始めたのは1950年代。以来、家族経営を続け、赤、ロゼ、白、スパークリングを醸造し、年間8〜9万本を生産している。

コルド・シュル・シエルから車を走らせること約10分。敷地に入ると、手入れの行き届いたブドウ畑が広がっていた。近づいてブドウの木を見ると、果実と呼ぶには程遠いほどの小さな実を付けている。



## コルド・シュル・シエル フランス人がもっとも愛する天空の村



1 1ゴシック様式の建物を花や緑が彩る街並みは美しい 2 前方に見えるのがコルド・シュル・シエル 3 4 サン・ミッシェル教会。内部は厳かな雰囲気。パリのノートルダムから贈られたパイプオルガンも見もの 5 典型的なゴシック様式の建物と狩りの様子を描いた彫刻の取り合わせがユニーク 6 革製品が有名。革を使った服飾小物などの店もあり、おみやげにも最適

オクシタニー地方には、まだまだ魅力的な場所がある。そのひとつが、コルド・シュル・シエル。2014年にはフランス国内の人気テレビ番組でフランス人がもっとも好きな村に選ばれた村だ。

アルピからは車で30分ほど。車を走らせていると、真つすぐ続く道の前方に突如小高い丘に立ち並ぶ煉瓦造りの建物群が現われた。それは空に浮かんでいるようにも見え、「天空の村」とも呼ばれているのかもしれない。

コルド・シュル・シエルはトールーズ伯爵レーモン7世によって1222年に築かれた城塞都市。百年戦争など、度重なる困難を乗り越えて、1870年頃からは織物や革製品などを主産業として繁栄し、近年は美しい風景に魅了されたアーティストたちが移り住むようになった。

オルモア門をくぐると、そこはまるで時間が止まったかのよう。細い石畳の坂道の両側には13〜14世紀に建てられたゴシック様式の建物が続き、その多くは、革細工やチョコレート店、レストランやギャラリなどを利用して使われている。壁に動物や狩りの様子を表した彫刻があったり、入り口にハサミや靴の彫刻がある元職人の家があったりと、建物を見ながら歩いていくだけでも楽しい。

主なみどころは南フランス風ゴシック様式のサン・ミッシェル教会や24本の石柱を支えられた広場など。緑豊かな田園風景が広がる坂の上の展望スポットもおすすめです。



トライブ カルカソンヌ  
Tribe Carcassonne

併設するプールも人気 4つ星ホテル  
「トライブ カルカソンヌ」  
ゆったりとした客室。  
併設するテラスからはラ  
シテを望む特等席



メルキュール アルビ バスティード  
Mercure Albi Bastides

シンプルでモダンな内装が目立つ「メル  
キュール アルビ バスティード」  
レストランに併設するテラスから  
は旧市街を望む



旧市街を望む絶好のロケーション

アルビの中でも随一の人気を誇るのが、世界文化遺産指定区域内にあるホテル「Mercure Albi Bastides」。市内を流れるタルン川に架かるボン・ヌフ橋の近くに立ち、絶好のロケーションを誇る。

赤煉瓦の建物はユニークな歴史を持つ。1770年に水車小屋として建てられ、その後精粉工場として活躍するも1974年に閉鎖。その後、2年の歳月をかけて改修工事が行われ、1987年にホテルとして誕生した。客室はダブルルームやツインルーム、ファミリールームなど56室。いずれもシンプルでモダンな造りが印象的だ。

テラスを併設するレストランも見逃せない。アルビの司教の鐘楼をはじめとする旧市街の「赤い町」を眺めながら郷土色豊かな料理とワインを味わえる。

立ち、シテまでは徒歩10分とアクセスが良いのも魅力だ。

客室はツインルームやダブルルームなど全70室。そのうち40室はシテを望むバルコニー付き。

もちろん、レストランからも堂々たる眺めを一望できる。夜はライトアップされるので、昼間とは趣が異なる幻想的な眺めを楽しむためのデイナーは格別。鴨やトリユフなど郷土料理も味わい深い。

このほか、開放感たっぷりのルーフトップテラスや室内プールがあるのもうれしい。



プルマン トールーズ サントル ホンブラス  
Pullman Toulouse Centre Ramblas

上品な雰囲気のスイートルーム。リビングと寝室(1)とアートギャラリーを思わせるロビーが印象的(2)朝食はビュッフェ形式。チーズやフルーツ、卵料理などが並び(3)国鉄の駅や空港へのバスが出るバスセンターに近く、アクセスが便利(4)セールスマネージャーのクジュ・グレゴリーさん



昼と夜で趣を変えるシテを一望

城塞都市・カルカソンヌの見どころといえば、丘にそびえる城塞とそこに広がるシテ。その威容をいながらにして満喫できるのが「Tribe Carcassonne」。オード川の河畔に



ホテル  
オクシタニー地方で  
泊まってみたいホテル

数々の世界遺産やフランス人に愛される村、そしておいしいワインなど、見どころが満載のオクシタニー地方。その旅の拠点におすすめのホテルをトールーズ、カルカソンヌ、アルビから一軒ずつ紹介しよう。まずはトールーズから。

おすすめは5つ星ホテル「Pullman Toulouse Centre Ramblas」。ホテルが立つのは街の中心部。キャピトル広場やサンセルナン教会なども徒歩圏内にある。

アートギャラリーとパートナーシップを結んでいるだけに、ロビーはまるで美術館のよう。大きなオブジェが目を引き、真っ白な壁には絵画が飾られている。

客室はスイートルームやデラックスルーム、スーペリアルームなど全124室。人気のスイートルームは広さが60㎡あり、リビングと寝室に分かれ、いずれも洗練された雰囲気漂う。

地元食材を使ったビストロスタイルの料理が楽しめるレストランも好評。そのほか、地ビールや創作カクテル、ワインを味わえるバー、24時間利用できるフィットネスクラブもあり、充実したホテルライフを送ることができる。